

俳句雜誌



空

平成31年3月10日発行

第17巻1号

通巻第83号



2019・2・3

**SORA** 83号

# 霜柱

柴田佐知子

地を割つて光となりし霜柱

木の周りくすぐるやうに寒肥す

霜踏んで胸より軍鶏の歩きだす

日向ぼこ母が一等席につき

着ぶくれていづれの信者にもなれず

入院の母に柚子湯の匂ひせり

母すでに深き眠りへ除夜の鐘

うしろより母覗きこむ初鏡

水平に肘の動ける筆始

繭玉に手を伸ばす母支へけり

繭玉に触れたき母の背が足らず

漁始め灘へと注ぐ酒光る

亡き父の湯呑で寒の水をのむ

丸めたるごとき子犬や日脚伸ぶ

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

桃源郷の入口隠す花芒

小春かな朝市で売る鍬と鋤

番号を付けられてゐる菊人形

助手席の三浦大根抱き下ろす

青空に飽きて雀は蛤に

福引を引くや無欲の顔作り

木道の端の黒さや小鳥来る

露坐仏の裏に年待つ拡声器

宮相撲骨を鳴らして立ち上がる

文殊寺の知恵拾はんと竜の玉

猪肉を捌く大鉈研いでをり

一句とて生きてる證竜の玉

まだ若き力士の脛や神楽月

一と幕のごとく暮れゆく冬障子

思ひ出し笑ひのあとの蜜柑かな

湯上りの鏡へ牡丹雪とこゑ

福岡 柴田志津子

長崎 荒井千佐代

膝の粉はらひてたたむ餅筵

鯨跳ねて出島の天秤棒に鏝

子に任せ見てゐるのみの年用意

蔓引けば風の生まるる葛の花

なんとなく覗く古井戸年暮るる

手を入るる捕れし海鼠の混沌へ

年歩む夫在りし日の床柱

礫像のあばら真冬の藍の日矢

元旦の闇押しひらく大太鼓

織悔室神父に葱の匂ひせり

連山をおさへて初日出でにけり

篁は怒濤のごとし冬岬

立ちあがる水輪の芯のかいつぶり

狐火や建て付け悪しき宿屋より

山茶花やわざとつかまる鬼ごっこ

寄つて来し白鳥の首無気味なる

埼玉 服部 早苗

実柘榴を山盛りにせよ火焰土器

鉄道草遅延を告ぐるアナウンス

みせばやと知れば水遣りなほのこと

風船葛の種しめりをり子の拳

火恋し脚注文字のいと小さく

風の言葉聴くや蓑虫貌を出し

老香具師の湯気を立てしめ小屋の奥

綿菓子のかすかな温み雪催

福岡 岸 洋子

脈うてる寒馬の首を叩きけり

夜神楽のイザナミイザナギ藁匂ふ

腹這ひて父の夜神楽見つめをり

風音を収めし山の濃りんどう

河豚鍋を囲み年金減る話

佛彫り岩甍へるつくつくし

杉山の繰出す風や大根干す

生き死にのほかは些事なり龍の玉

北九州 深川 淑枝

稲架組みし縄の端垂るる山日和

ひと雨に掛稲匂ふ日暮かな

空稲架や触れむばかりに山の星

顔上げて雲遠かりし葉掘

猟期待つ照りかげりして峠口

碎石の火葉置かるる秋の山

発破後の山のくもりや渡り鳥

鷹旋回空の怒濤を越ゆるとき

広島 戸栗 末廣

朝がたの空の水色秋つばめ

祝ひ唄山は粧ひはじめけり

子規の忌の月の残れる朝の径

食卓にとどく潮騒秋彼岸

吹きながら朝顔の種選びけり

底抜けの空より银杏黄葉かな

今朝冬の浅漬に振る塩加減

鳥ごゑの午後よりかはる枇杷の花

福岡 角野良生

坪庭に坪の秋天ありにけり

坂の上には別の秋風吹いてをり

さはやかに片付きし部屋落ち着かず

蛇穴に入るためらひを尾にのこし

種茄子の申し分なきすがれぶり

松手入枝揺さぶつて了りけり

托鉢の尼の素足に忽と冬

糠床も冬の緊まりとなりにけり



北海道 押田裕見子

目つむれば生きよ生きよと虫時雨  
噂にもならぬ片恋山眠る  
花も葉も茎も髪膚も枯れにけり  
踏み入れば不意にざわめく枯野原  
又の世は存分に飛べ檻の鷲

千葉 原友子

絨毯の巻き癖に乗せ「罪と罰」  
茅葺の厚き切り口新走り  
警策の音寒林を正しけり  
チェーンソーの音がいきなり十二月  
猟銃音走りて山の鎮もれり

福岡 栗原京子

バス停に椅子ほしき日や秋麗  
引き倒す卓袱台はなし秋の暮  
鶏小屋へ卵を取りに野分あと  
鶏の餌をたつぷりと野分あと  
本棚の奥に抜け道冬館

熊本 松田明子

台風来丈あるものは寝かせ置き  
目障りな黒衣のよぎる村芝居  
崩れ築水混みあひてをりにけり  
崩れ築水の勢ひ容赦なし  
託されしバトンの重み運動会

長崎 千波 悠

鍋囲む胡坐おしあふ獵仲間  
猪撃ちのポケット多き胴衣かな  
今年また同じ山河に柿吊す  
茎の石傾きながら沈みけり  
留守番の小春の縁にひとり囲碁

太宰府 山本 則男

玄海や手毬のごとく浮寝鳥  
白鳥の水押さへつつ着水す  
凍鶴の大地に刺さるごと眠る  
真つ青な空を見てより毛糸編む  
駄菓子屋の色のとりどり日脚伸ぶ

福岡 山内 碧

訃報聞くのみのふるさと冬に入る  
もう誰も住まぬ生家や冬の梅  
コート掛かる母の曲がりし背のままに  
日の差して社の屋根の今年藁  
にはとりの有らぬ刻鳴く神の留守

北九州 河原 敬子

大ざつばな旅の地図なり鳥渡る  
霧茫茫々高天原はこころかと  
猪垣を開けて古道の神詣  
神の田に一竿だけの稲架を組む  
三山の見ゆる階柿を食ぶ

東京 山田 正子

交番にピザの宅配十三夜

マフラー巻き逢ふも別れも改札口

綿虫とすれちがふ路地灯りけり

冬に入る人を恋ふかに赤提灯

整列に少し間のある帰燕かな

大阪 井上 和子

中有かな畦を離るる秋の蝶

遺されし文箱に眼鏡虫しぐれ

家系図のひとり喪ふ黒葡萄

秋蝶やまたも繙く遺稿集

散骨を望むこの海鳥渡る

長崎 松尾 龍之介

頓首して雀の落穂拾ひかな

秋灯す船に遅れて陸もまた

訳ありの秋果とされて盛られをり

秋澄むや雲のシーツを取り換へて

圧せば押し返す風船葛の実

須恵 苑 実 耶

塩作る男の岬石露の花

榎の実や猫は城址を住処とし

ちよつとした枝にも掛くる大根かな

寒晴れや紙飛行機は風捉へ

夢はじめ不倫の愛に走りけり

福岡 亀井紀子

境内は笑顔ばかりや文化の日  
ふたりには広き食卓冬日和  
安売りに伸ぶる千手せんじゆや冬ぬくし  
青空を曳いて白鳥来たりけり  
風評の源とかや着ぶくれて

福岡 永淵恵子

違ふ世を見たき雀は蛤に  
雲に入り雲にほぐる鷹柱  
山々を地図と照らして秋うらら  
長き夜の別れ話に倦みにけり  
似顔絵を描かれてゐる文化の日

直方 石橋幾代

月光や寡黙な夫のゐるやうな  
炭鉱の友はちりぢり秋夕焼  
焚火より離れ現世に戻りけり  
鶏小屋の裏の湿りや藪枯らし  
焼海苔を更に炙りて寒の入り

糸島 小林朱夏

朝日浴び凍灌動きはじめけり  
マスクして笑はぬ顔となりけり  
花こぶし背負つて見するランドセル  
涅槃図の裏より覗く寺の猫  
歯が抜けて狼狽へてゐる花の下